

バイケイソウ

Veratrum grandiflorum

ユリ科

名前の由来

梅に似た花をつけ、葉は蕙蘭(ケイラン)に似ていることから名付けられた。ケイランは本来シンビデュームの類であるが、ここではシランを意味する。有毒で、殺虫剤として用いられることから、ハエドクソウ、ハエコロシの別名もある。

漢字名：梅蕙草



バイケイソウ

形態的特徴

高さ1~1.5mになり、花茎は直立し、大型の葉をまばらに互生させる。葉は広楕円形で先がとがり、縦に多数走る葉脈に沿ってひだができる。下部の葉は基部が鞘状になって茎をかこむ。花は径1~2cmほどで淡い緑がかった白色、6枚の楕円形の花びら(花披片)をつける。上部で多くの枝を分け、多数の花が密につき、大型の総状花序になる。花には異臭がある。

類似種と見分け方

コバイケイソウ(開花期)。タチギボウシ、オオバギボウシ(山菜採取時)。

コバイケイソウは高山帯に生育し、バイケイソウとよく似るが全体が小型。バイケイソウ、コバイケイソウは有毒で、若芽の時はタチギボウシ、オオバギボウシなど、山菜として利用するユリ科植物の若芽に似るので注意が必要。バイケイソウ、コバイケイソウの若芽では葉が茎を囲むように

つき、葉柄はなく、葉脈はすべて葉の基部からのびる。タチギボウシ、オオバギボウシでは、葉は根元からのび、長い葉柄があり、葉脈は中央にある一本の太いものから枝分かれするようにでる。以上の相違点で見分ける。



バイケイソウの若芽。こちらは毒草



タチギボウシの若芽。こちらは山菜

生活サイクル

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
開花期			■									
結実期				■								

魚類

底生動物

両生類
爬虫類

トンボ

チョウ

樹木

(在来種)
草花

(外来種)
草花

哺乳類

(水辺)
鳥類

(草原・樹林)
鳥類
ワシ・タカ

生育環境・分布

平地～山地の湿った林や草原で生育する。

分布：国外分布は、樺太・千島・朝鮮・中国東北部・ウスリー・ダフリア[※]・カムチャツカ。

国内分布は、北海道と本州。

北海道内分布は、全道。

十勝地方では、平地～山地の湿った林や草原で見られる。

※ダフリア：シベリアのバイカル湖以東

生活史

開花時期：6～7月

寿命：多年草。

開花までの年数：不明

他生物との関わり

花には虫が訪れる。

興味深い話

■有毒で、特に根は猛毒。成分としてはアルカロイドのペラトラミン、ルビジヤーピン、ソラニンが含まれており、間違えて食べると、嘔吐、血圧低下、手足のしびれ、めまいなどを引き起こす。殺虫作用もあるため、農業用殺虫剤や、便所のうじ殺しなどに利用されている。

■花は雄しべと雌しべを持つ両性花がほとんどだが、雄しべのみを持つ雄性花も少数つける。花は6月～7月にかけて咲き、種が実った後、急速に枯れて8月には姿を消す。

■十勝地方のアイヌ語では「ホシキテイネ」という。

■他地方のアイヌ語ではシクペキナ（成長する・草）と呼ばれる。春先から出始め、高さ1～1.5mにも急成長することから、アイヌの人たちは、成長の遅い子どもに対して「シクペ、シクペ（伸びろ、伸びろ）」と唱えながら、バイケイソウで尻を叩いたという。



花の咲く前のバイケイソウの群落。湿った林内などに生育する



バイケイソウの花。枝分かれて多数の花が付く



バイケイソウの花

配慮事項

生育している環境全体が重要である。

参考文献

「改訂版 牧野新日本植物図鑑」牧野富太郎 北隆館 1989

「北海道植物図譜」滝田謙讓 自費出版 2001

「日本の野生植物 草本Ⅰ」佐竹義輔・大井次三郎 他 平凡社 1982

「アイヌ植物誌」福岡イト子 草風館 1995

「図説 花と樹の大事典」木村陽二郎・植物文化研究会

・雅麗 柏書房 1996

「北海道薬草図鑑 野生編」山岸喬 北海道新聞社 1992

「新版 北海道山菜図鑑」佐藤孝夫・小林隆正・久保秀樹 亜璃西社 2002

「知里真志保著作集 別巻Ⅰ 分類アイヌ語辞典 植物編・動物編」知里真志保、平凡社 1976

魚類

底生動物

両生類
爬虫類

トンボ

チョウ

樹木

(在来種)
草花

(外来種)
草花

哺乳類

(水辺)
鳥類

(草原・樹林)
鳥類
ワシ・タカ